

名古屋市蓬左文庫蔵『続学舎叢書』翻刻（十四）

狩 野 一 三三

今回は、「名古屋市蓬左文庫蔵『続学舎叢書』翻刻（十三）『あいち国文』第十三号、令和元年九月、あいち国文の会」に続くものである。今号では、『続学舎叢書』第三冊「寺社方火消目印」、第四冊「難追問答」、「易蘇問答」の翻刻を試みる。

「寺社方火消目印」は、書名の下に「寛政八年／辰極」とあるのみで、著者などについては不明である。各組の旗、提灯などの用具について、それぞれの図を紹介しているものである。一部の図に、六角形に「八」の印を持つものがあり、尾張藩の火消に関する資料と思われる。

「難追問答」は、著者は近松茂矩で、享保八年（一七二三）に成立している。尾張大國霊神社の難追神事を「淫祀」とし、停止あるいは改善すべきという自説をのべたものである。国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースによ

れば、伝本の所在は『続学舎叢書』所収の本書のほか内閣文庫、高知城歴史博物館山内文庫に確認されている。本文には相当程度の異同がある。なお【一丁ウ】の「右ハ」訂まほし」は朱筆による書き入れである。著者近松茂矩は元禄十年（一六九七）に生まれ、安永七年（一七七八）に没している。尾張藩士にして兵学者であり、のちに長沼流兵法を学んで自ら流派を創設している（全流錬兵伝。のちに一流流と改称）。正徳三年（一七二三）には側小姓となり、四代藩主吉通に近侍した。また、神道を吉見幸和に、儒学を松崎睡軒、小出洞斎、宮崎古崖に、和歌を觀景窓長雄に、俳諧を支考に学び、茶道もよくした。また、多くの著作をなし、本書のほかにも尾張の君臣の言行や故事などをまとめた『昔咄』十三巻など、七十以上にも及ぶ。

「易蘇問答」は、著者は深田正韶で、天保七年（一八三六）

に成立している。深田正韶と、易蘇堂（高松貝陵）との易学に関する問答を記したものである。経験ゆたかな正韶が易蘇堂を手厳しく問い詰めていく場面が複数見られる。国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースによれば、伝本の所在は『続学舎叢書』所収の本書のみとなっている。なお【十三丁ウ】に見えるルビは朱筆である。著者深田正韶は安永二年（一七七三）に生まれ、嘉永三年（一八五〇）に没している。尾張藩士にして儒学者である。石山香山、中村習齋に儒学を学び、特に易学に長じ、そのほか諸芸に熟達した。江戸においては十代藩主徳川斉朝の侍講をつとめ、帰藩後は諸職歴任の後、書物奉行として『尾張志』を監修した。他に『天保会記』など多数の著作がある。また高松貝陵は、生没年未詳。名を芳孫、辰栄といい、貝陵、易蘇堂と号した。漢学や易学を修め、江戸で講説した。著作に『易道活眼』などがある。なおそれぞれの人物については『国書人名辞典』などを参照した。

【凡例】

翻刻にあたって、底本にできる限り忠実であることを原則とした。但し、読解の便のためと印字の煩雑を避けるため、次のような処理を施した。

一、漢字は現在通行の字体に統一した。異体字や略字など

も通行のものにした。但し、一部そのままにしたものもある。

二、誤字、当て字、送り仮名、仮名違いなどもそのままとした。

三、合せ字は、開いて表記した。

四、底本に稀にある濁点はそのままとした。

五、判読できなかった箇所は■とした。

六、各丁のはじめに【一丁オ】などと記した。

七、改行は必ずしも原本に対応しているわけではない。

【翻刻】

【六十八丁オ】

寺社方火消目印（寛政八年／辰極）

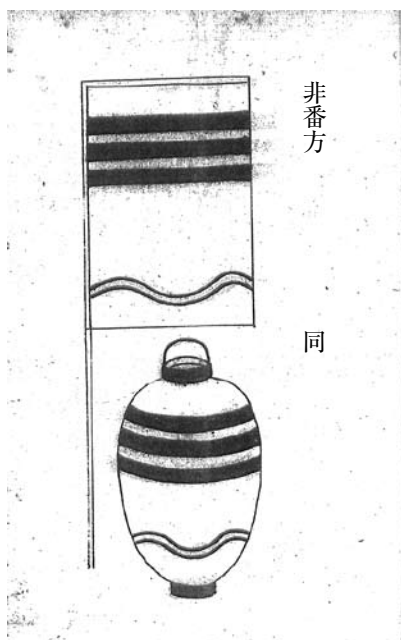
【六十八丁ウ、六十九丁オ】

（空白）

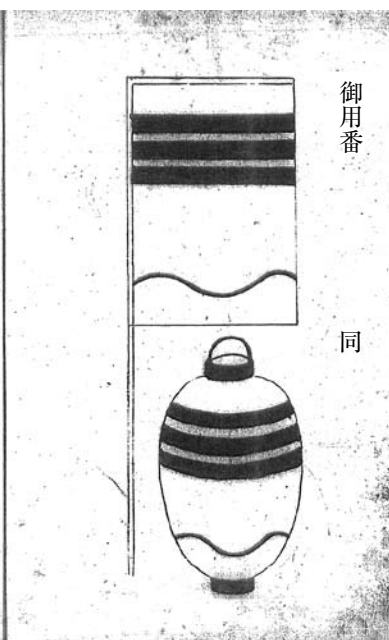
【六十九丁ウ、七十丁オ】

（空白）

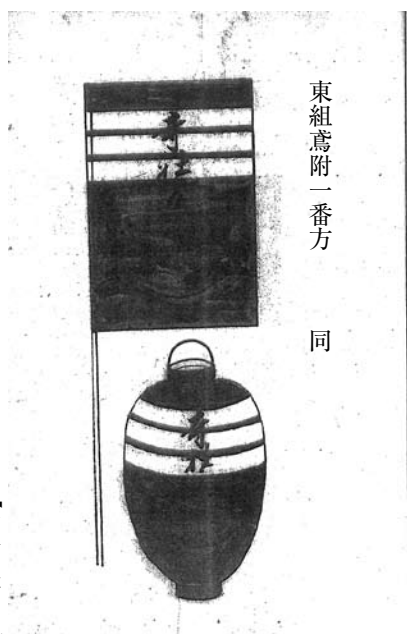
【七十二才】



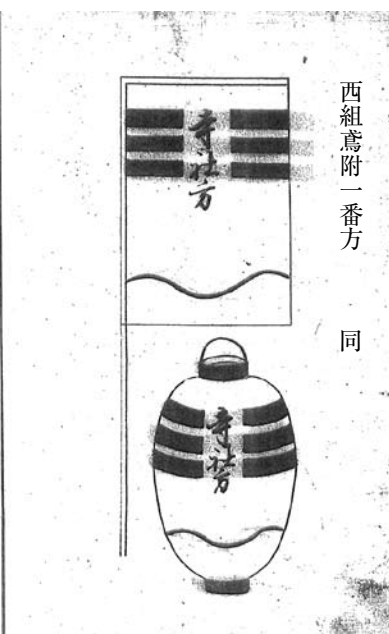
【七十丁ウ】



【七十二才】



【七十二丁ウ】



【七十三丁オ】



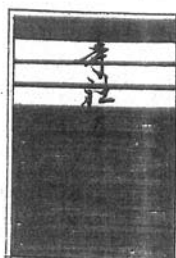
東組龍吐水附

同



東組鳶附式番方

同



【七十二丁ウ】

【七十四丁オ】



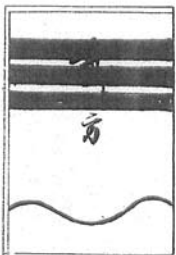
西組龍吐水附

同



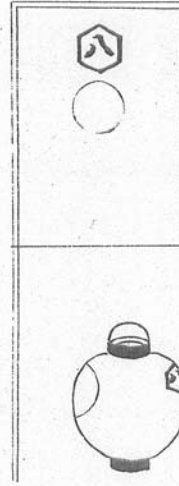
西組鳶附二番方

同



【七十三丁ウ】

吟味役

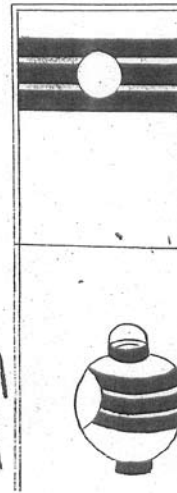


【七十四丁ウ】



【七十五丁オ】

手代



【七十五丁ウ】

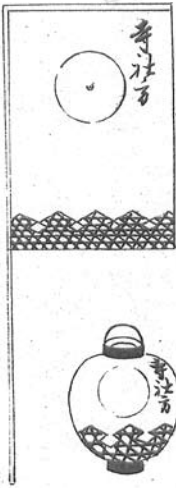
同心小頭

西組鳶頭



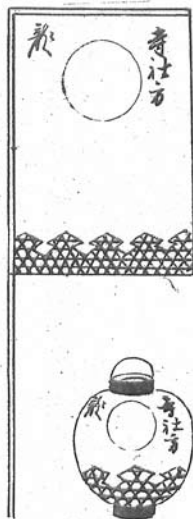
同心人別

同



【七十六丁オ】

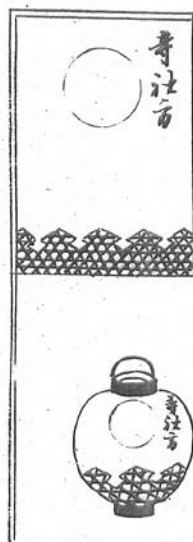
【七十七丁オ】



龍吐水鳶頭

同

【七十六丁ウ】



東組鳶頭

同

【七十八丁オ】



東鳶頭御預蠟燭箱持附



湯桶懸^リ鳶載許人為持候中揚

龍吐水小頭



【七十七丁ウ】



東組鳶小頭一番方



西組鳶小頭一番方

同式番方



同式番方

第四冊

【二丁才】

目錄

- 一 儼追問答
- 一 易蘇問答
- 一 禁書目錄
- 一 大日本史表
- 一 頭人馬頭人由緒書
- 一 琵琶記
- 一 佐野某刺田沼氏弁

【一丁ウ】

寛保三癸亥
御触

国府宮儼負神事向後儼負人やとひ入用之神祭如恒例
令執行人を捕候儀は御停止歟 仰出候来年より右祭 日
往來差支無之如何之国府宮なるて正月二日より晴天七日
初市興行小芝居小見世物をも
御免市終之日神福德も有之答候事

亥十二月

右ハ^(殺力)生之奉紙江御諸士儼負捕られ御^ニ而右

御触之通相成御国聞伝然共亥と有共何年の

亥にや訂まほし

承応元年 辰

瑞竜公御治世記

正月十三日於尾州御城代組久留測金右衛門村田源左衛門
兩人知行所用事ニ付罷越今日中嶋郡国府宮祭礼神人途中
ニ而行進依者恒例兩人之馬子を捕而イケニエトス仍之侍
之不合似相渡候御料ニ而御改易被仰付久留測村田種々相
断候故召仕を不捕馬子を捕候由也御通村田源四郎當時在
江戸父源左衛門御改易被仰付^ニ承於江戸立帰

【二丁才】

儼追問答

小引

和漢自^レ古淫祀多^シ矣吾^カ
尾張大國魂社如^ニ儼追祭^ノ今既^ニ失^ヒ故
実^一混^ニシテ^一仏法^ニ遂^ニ以^レ不^レ免^レ称^スコトヲ^一淫祀^一者^ノカ^ニ乎^ニ先

輩多^ク有^レ疑^ニ于此祭^ニ然雖^ニ有^一津嶋神宮神学類百卷作者如

ニ真野時綱^一博学之名^上者^甲不^レシテ^一克^一弁^スル^{コト}之^ニ而曰^ク非^ニ淫

祀^ニ也況^ヤ如^レ予^カ魯鈍者^ノ何^ニ能^ク弁^シシ^カ之^ニ哉然^モ

予有^下於^ニ此祭^ニ存^{スル}微意^ヲ不^レ能^一默止^一而講

武之暇屈^ニ于^一風^ニ水^ニ翁^ノ之机^下屢^ニ伸^ヲ

レ思而承^リ翁之説^ヲ瞭然^トシテ^一曉^ニ達^ス焉^於於^レ爰輯

【二丁ウ】

録^{シテ}其説^ヲ於^一一冊^ニ以^レ藏^ニ恭軒文庫^ニ而

価^ニス不^レ倦之恩^ヲ焉是亦講^ニ究^{スル}於道^ノ一端^{シテ}

者乎莫^{シト}三^ニ非家之弁論科^ニ無益之誹^ヲ云^レ爾

享保癸卯仲冬望

藤原姓 茂矩謹書

【三丁オ】

難追問答

問曰國府宮ノ難^{ナライ}負祭ハ我國故実ノ祭祀ナルヤ

答曰我國神祇道ノ祭祀ニ非ス惟フニ陰陽家ニ執行フ追^{ツイ}難^イノ変風ナラン歟今追難ノ法ト異ナルコトアル者ハ中比誤リ取違タルナルベシ追難^{ツイナ}ヲ難^{ナライ}追トシ難^{ナライ}追ヲ書違テ國中ノ難^{スバ}ヲ負スル祭也ト云ヒノ、シル事ニナレリ追難ノ礼ハ固ヨリ異邦ニ效テ文武天皇ニ始レリ

私ニ云和漢追難ノ説ハ難追勘文ニ委シキ故

コ、ニ略ス

問曰此社ノ祭祀古記ニ載タルヤ

【三丁ウ】

答曰梅華無^レ尽蔵ニ粗記シタレトモ此書ハ引証ニナリ難シ又大成経ニモ記シタレトモコレハ偽書ニテ一向ニ取ニタラス大成経破文ト云フ書ニテ虚誕アキラカナリ

問曰他國ニモ此祭ニ同シキ事アリヤ

答曰昔ハ筑前住吉ノ社及ヒ香椎宮大宰府ノ觀音寺ニテ路人ヲ捕ヘ困厄セシメ我國ノ難負ニ似タル祭アリシ近代ハ多ク相止テ其沙汰モナシトシ

問曰此祭神祇道ニ無ハ此社ニテ行フコト決シテ非ナルカ

答曰^予嘗テ其儀ヲ見ルニ吉祥天ノ像ヲ掛テ第一社僧ノ

所^レ專^{トスル}ナレハ元來本堂ニテ執行タル事トミヘタリ国史ノ所見昔國々ニテ大ニ難スナト云ヘハ此所國府宮ユヘ此

【四丁オ】

神宮寺ニテ難ヲ執行タル其遺風ナルヘシ今ヤ咎ナキ

人ヲ捕ヘ令^ニ困苦^一且ツ數郡ノ民ニ害アルハ淫祀ニ非シテ何ソヤ然レハ神祭ニ非ルコトヲ神社ニオイテ行^レ之コト決テ非ナリ

問曰淫祀トハ如何

答曰淫ハ過也乱也ト注シテ無稽無拠非礼不義ノ

祭祀ヲサシテ淫祀トハ云ナリサレハ礼記ニモ淫祀無^レ福■

ト云リ神アニコレヲ享ンヤ

問曰彼社人ノ説ヲ聞ニ將軍家ノ御朱印ヲ奉シコレヲ

以テ無遠慮ニ村民及ヒ旅人ヲ捕ヘテ天下ノ靜謐

ヲ祈ルト云リ然ラ淫祀トハ如何

【四丁ウ】

答曰彼社人等文盲ニシテ多ク虚誕アリ御朱印アラハ

寛文七年御証文改ノ時何ゾ不^レ出^レ之ヤ御朱印ナ

キコトハ決セリ淫祀何ソ天下ノ御祈祷トナランヤ神慮

ニ不^レ叶^ニミニアラス大ニ神道ニ害アリ

問曰社説ニ難負一人ニ國中ノ難ヲ負セ追放ス

ト云リカ、ル子細モアリヤ

答曰無稽ノ言ナリ孟子^ニ曰行^ニヒ一^{ツノ}不義^{一ヲ}殺^{一ヲ}一不辜^{一ヲ}而得^{ニルモ}

天下^ヲ皆不^レ為也トソレ難負ハ纔一人ナレトモ千年ニ及ヘハ千人ナリケリ無罪ノ者ヲ困苦セシメテ國中ノ難ヲ抔ントスルハ不仁ノ所為君子ノ惡ム所ナリ道ニ於テ議スルニ足ラスア、此祭祀最上至極ノ神事ナラハ二所

【五丁オ】

宗廟ヲ始め何レノ神社ニテモコレヲ行フヘケレトモ非道ノ祭ユヘ曾テナシ識見アル社人ハ此祭ヲ聞テハ歎息スル而已

問曰杜家ノ話ニ福嶋左エ門大夫正則清須ノ城主

ナリシトキ此祭ヲ停止セシカハ彼家滅亡セリコレ

我神ノ祟リナリト云リ義思フニ此談モ無稽ノ

コト也如何

答曰汝カ云如クコレモ亦無稽ノ造言ナリ正則カ難負

停止ノ例ヲ引ハコレヲ嘉例ト称スヘシ如何トナレハ正則早

賤ヨリ既ニ清須ノ城主トナリ難追ヲ停止セシニ間モ

ナク関ヶ原ニ合戦シ大功ヲ遂テ安芸備後ニケ国

ノ守護トナレリコ、ヲ以テミレハ難追停止アリテ

【五丁ウ】

神慮ニ適ヒ其賞ニ神力ヲ添ラレテ大功ヲ遂タリト云トモ

経ヘカラサルカ又正則滅亡ノ事ハ数年ヲ経テ後ニ我身ノ

積惡ニテ滅亡ス自ラ作セル災ナリコレヲ以テ難追停止

セシ神罰ナリト云ハ大ニ迷ヘリ織田信長公モ清須御在

城ノトキ此難負ヲ止給ヒテ滅亡アリシナト云ノ、シルハ国

主領主ヲオトシテ止マジキ為ノ詞ナリ信長ノ止メ玉ヘル

カ実ナラハ此モ神慮ニ叶タルト云ヘシイカントナレハ武威益盛ニシテ清須ヨリ近江ノ安土ニ迂リ遂ニ天下ヲ掌握シ玉フカ、ル目出度コソアラマホシケレ其後明智カ為ニ殺ラレ玉フハ其身ノ驕長大ニシテ不仁ナルヨリ起レリ難負ヲ止ラレタル罪ニアラス国主ハ藤原ノ高房ノ

【六丁オ】

如ク淫祀ヲヤメ巫覡ヲ屠殺シテモ正ニ帰スルヲ于善トス

文徳実録ニ載テ此ヲ美談トス秦ノ川勝カ大部

多力常世虫ヲ祭于打擲シテ止タルヲ歌ニ作テ称歎スル

ヲ日本記ニ見ヘタリ凡ソ神罰ナラハ其当座ニアタラン

コソ左モ有ヘケレハハルノ年歴テ外ノ惡逆ユヘニ滅亡

スルヲ取合テソレヨコレヨト云ハ女童ヤ巫覡ノ常言ニシテ

君子ノ所^レ不^レ取ナリ正則以後ニ薩摩守忠吉卿

御在職ニテ是亦難負御停止ナカリシカトモ御短

命ニテ御子モナカリシ爰ヲ以テ曉ルヘシスヘテ道于

学ヒザル巫覡ノ類ハカ、ル虚妄不当ノ説ヲナスコト

多シ其折節幸ニ洪水大風地震火災時疾流行シ

【六丁ウ】

或ハ国守ニ病難等アレハ必其神ノ祟ナリト云ヘリ夫神ハ

明ニシテ一点モ曇リナシ其明ナル神ヘ正直ヲ以テ行フニ

何ソ祟リアランヤコ、ヲ以テ見レハ今更難負ヲ禁セラ

レテ若災害アリトモソレハ俗ニ云鳥ノ鳴合セニシテソレヲ

以テ神ノ祟リトスルハ信用スルニタラス惑フコトナカレ

問曰方ニ今翁ノ説ヲ聞ハ難負ノ神事淫祀ナルコト

明白ナリ然レハコレヲ御停止アリテモ可ナラン歟

答曰御停止アリテ可ナリ^予其害ヲ解シ彼難負ノ日ハ

枇杷島河ヨリ西北春日井郡中嶋海東海西丹

羽葉栗ノ六郡ノ人家門戸ヲ閉テ通用セス

農工商各其家業ヲ怠ル一日トイヘトモ其失墜

【七丁オ】

斗ルヘカラス古語^二曰^一一夫不^レハ耕則一人受^フ其饑^一一婦不^レ織則一人受^フ其寒^一トイヘリコレ其害アル一ナリ海道ハ天下ノ

通路ニテ半時モ塞クヘカラス然ニ難負ノ日ハ如何程ノ

急用ニテモ往還セス旅人イタツラニ美濃路ニ滞留

セリコレ其害アルニツナリ六郡数万軒ノ内急病或ハ

臨産等アルヘシ此日医師等ヲ招キヨセ危急ヲ救

フコトアタワス其家族ノ難義許多ソヤコレ其害アル

三ツナリ伝ヘキタ延宝ノ比迄ハ社人斗ニテ難負ト

リシニ村民用心シテ次第第二捕難キニ因テ社家

一人ヨリ四人ツ、出シ都合六七十人斗モ出セシニ何レ

ノ比ヨリカ寄進ト称シ彼社ヲ尊信ノ輩又ハ不信

【七丁ウ】

ニテモ事ヲ好ムノ族四方ヨリ群集シ凡ソハ千五六百人モ

アリト其後ハ一万余ノ人数トナレリイカナレハ増大スルソ

ト云ヘハ

六郡ノ百姓若キ者共其当日ハ終日門戸ヲ閉氣詰リナル

ヲ嫌ヒ人ヲ捕ニ出ル為ニ彼社ヘノ寄進ト称シ年々ニフヘ

ユクマ、ニ大ナル竹筒ニ酒ヲ入レテ持参シ赤ザイ白ザイヲ

付テ背ニサシ或ハ具足ノマネヲナシ思ヒこゝニ出立テ神

威ヲ借テ村々ヘ発向シ酒食ニフケリ飛廻ル彼社家

ノ中ニモ長太夫ト云ハ難負ノ大将也トノ、シリ大

大ナル鈴ノ有合セタルヲ木刀ナトニ取付テ古禁中ヨリ

節刀賜テ大将ヲ勤ルナト、附会ス村々ニテハ大勢

入込田畠ヲフミアラシ損亡トナルヲカナシミ村民談

【八丁オ】

合シテ金三両或ハ四五両アツメテ前方ニ神主野々部左門ト

社僧威徳院ト中藁頭長太夫ト三人ノ方ヘ賄賂ヲ送り

大勢来タラサルヨウニト頼ムユヘ其所ヘハ往カス賄賂ヲ贈

ラサル村ヘハ大勢推込メト神主指図スルユヘ意趣アルヤウ

ニ押込テ^カノソメヲ切ヲトシ麦ヲフミコナシ菜大根ヲヌキ

ステ家々ノ垣ヲ引ヤフリ刀脇差ヲヌイテ窓ノ中ヘサシコミ

木苗草木ヲモ伐タオシ時ノ声ヲ挙テヲメキサケビ若シマド

ヨリノゾク者アレハソレヲ難シテ捕ヘユク子ヲ捕ワレテハ

親カナシミ親ヲ捕ラレテハ子憤リ刃傷ニ及コト数度際限

ナシ庄ヤヲ捕ラレテハ村中トシテ金四五両持参シテモラヒ

返シ外ノ者ヲ替リニ出シテ退クモアリ作毛荒ルレトモ

【八丁ウ】

神事ノ由ナレハ申立ニモナラストテ皆銘々ノ痛ミニナル

如此年々ノコトナレハ村々ヨリ賄賂ヲ出スコト十箇村ニテ

金三十兩廿ケ村ニテ金六十兩ソレヨリ増スコトハアレトモ少キコトナシ

社家欲ニフケリ面白サニ此事増長スルコトヲ悦ユヘ中ニ止コトハ思ヒモヨラス年々氏子ニナリ且方ニナリ増益シテ利ニ利ヲ重ルユヘニ神威ヲ申立附会サマ^〱多キ中ニモ笑ヘキコトコソアレ関ケ原ノ役ノトキ神君入ラセラレシニ其時神主大ナル柿ヲ指上タレハ御喜悅ニテ大柿ヲ手ニ入タリトノ上意也折節洪カリケレハ治部少輔ヲ取タリト被仰シト其時上意ニ難儀
怠コトナカレ御子様方ノ飛脚斗ハ捕ル事ナカレトノ

【九丁オ】

上意也ケリト実ラシク物語ス是ハ美濃瑞雲寺デノ事ナリ関ケ原軍記ニアリ其事ヲ附会スルコソウタテケレ頃日ハ誰ソ氣ヲ付タレハコソ其事ハ云ハヌカ、ル狼藉蒨田乱妨同意ニ大勢アレマワル此輩一日産業ヲ怠リ且又酒食ノ費用許多ニシテ然モ

益ナシコレ其害アル四ナリ適々人ヲ見カケテハ大勢乱入シ田畠ヲ踏荒ス翌日土餅ヲ埋ム節モ同ク田畠ヲ踏コナス其作モスタレルコト限ナシ其地主ハ罪ナクシテ大ニ禍ニアヘリコレ其害アル五ナリ惣テ近年ハ村民用心キヒシケレハ捕手モ剛毅ヲ以テ捕ントスルユヘヤ、モスレハ鬭諍ニ及ヘリ凡ソ禍ハ纔ナルヨリ起レリ俗ニ千丈ノ

【九丁ウ】

堤モ蟻ノ穴ヨリ崩ル、トイヘリ此難儀捕ン捕レジトスルノ争論ヨリ如何斗ノ躁動ニ及フヘキモ知レスコレ其害アル六ナリ難儀ニ捕レシ人死スルニハ至ラサレトモ其捕ル、ノ際ノ恐怖終夜ノ困苦親族ノ恨愁イカ斗ナラン罪ナクシテカ、ル困厄ニ就コト実ニ憐ヘシコレ其害アル七ツナリ凡ソ是ヲモ忍フヘクンハ孰ヲカ忍ハサランヤア、痛マシヒ哉

問曰國府宮ノ神主野々部左門以下翁ノ門生ナリト聞ケリ然レハ翁ナンゾ教訓シテコレヲ止サルヤ

答曰野々部以下モトヨリ予カ門ニ來レリ故ニ連々

教訓シテ識アル者ハ淫祀トテ甚タ嘲弄スレハコレヲ

【十丁オ】

止テ可ナリ其神主ヨリ其害ヲノヘテ停止シ度ノ旨ヲ言上セハ有司何ゾコレヲ抑留アランヤ速ニ請ノ俾ニ止ヨトアルヘシト再三コレヲ強レトモ不学ニシテコレヲ弁セス且貧窮ニシテ志モ立難ク今ニ至リテ止ス權神主蜂須賀

彦大夫ハ^子ト心ヲ同シテコレヲ停止シ度ノ旨アレトモ正神主肯ンセスシテ本意ヲ遂サルトノ旨ヲ語レリア、彼非礼ヲ知テ而止サレハ^子如何トモスヘカラス

問曰今ノ如キ祭ニテハ淫祀ナリコレヲ変シテイカ、セハ可ナランヤ

答曰コレ元來追儼ノ取違ヨリカ、ル事トナリ行ハ今変シテ追儼ノ古式ノフリニ勤メハ可ナラン乎熱田藥師堂

【十丁ウ】

ニテモ鬼祭トテ真言宗ヨリ勤ム但シ鬼役ヲ定メ置
ケリ故二人ヲ捕ニ及ハサルナリコレ追難ノ遺風ナリ当社
ニテモ鬼役一人定置社領ノ内ヨリ下行米ヲ宛行フテ

此祭ヲナサハ可ナラン乎ソレトモニ我神道ノ故実ニアラス
陽陰家ノ所行ナレハ識アル者ハ此ヲナサシ然トモ左アラ
ハ今ノ如ク大二世二害アラジセメテハ如此ニナリトモ改タ
キコトナリ

問曰 誠公ノ御時ニ此祭ノコト御沙汰アリシト聞ヌ然
モ敬公明公ノ御時ニ御停止ナキコトヲ今更御停止アリ
テハ先公ヘノ御憚アランカトノ旨ニテ其俣サシワカレ
シトモ語リツタヘヌ左アリシニヤ

【十一丁オ】

答曰誠公御尋アリシハ国府宮難負ノ義神道ニ有^レ之ヤト
カク不仁ナル祭ノヤウニ思召ノ間御停止アリテハ如何アル
ヘキヤ相考委細申上ヘキトノ旨ナリシ因テ其大概ヲ注進セ
シカ其比ハ^予學問未熟ニテ詳密ニ言上スルコトヲ得ス今ニ
コレヲ悩メリ思フニソレヨリ先敬公明公ニモ御不審ニハ思
召玉フヘキカサレトモ未決ノコトユヘ其俣ニサシワカレヌ
ト覺ユ殉死ナトハ御先代ヨリ有来シカトモ是非分明ナレハ
御停止アリシニ誰カ其御停止アルヲ難スル者ナシ近クハ熱
田社正月十五日ノ印地モ其害大ヒナリシカハ近年此ヲ御停
止アリシ今難負

御停止アリトモ義ニライテ害ナク而シテ六郡ノ人民及ヒ旅
人ノ喜悅イカ斗ナラン希クハソレ御停止アランコトヲノミ

【十二丁ウ】

問曰此難負何ノ比ヨリ始ルトモ知レス慥ニ停止セシ
人モナシ然ニ翁コレヲ御停止アラハヤノ談ハ理ニライ
テノ必然ナレトモ神慮ハイカ、アルヘキヤ

答曰拙哉汝カ辞ソレ彼社家等神ニ事フルノ理ヲシラス
シテ妄リ二人ヲ困メテ神ヲ祭ル何ソソレ不仁ナルヤ抑神ハ
非礼ノ祭ヲ享ズ^予イマ正直ノ道ニ則リテ云フ神以神

タラハ何ソ神慮ニ違フヘキヤ若^予ガ說神慮ニカナワス
ハ其祟リ^予一人ニ蒙リナン但シ不學ノ社人等ハ自己
ノ利ヲ失スル事ナレハ大二怒ランカ怒テ^予ト對セハ予
一言ノ下ニ雌伏セシメン事掌ノ中ニアリ何ソ

コレヲ恐レンヤ然トモ貧究ノ社人等難負ヲ權ニ負テ

【十二丁オ】

米錢ヲ得渡世ノ資^{タス}ス然ルニ今日急ニ此ヲ停止セラレハ
皆難義ニ及ハンカ依テ穩便ニ事ヲ処セラレントナラハ
前ニモ云コトク追難料トシテ外ニ下行米カ或ハ田地等ヲ少
シ斗増給ハ補フ人モナク捕ヘニ出ル躁動モナク鬼役ヲ定置
テ執行フトキハ今マテ有来ル事ヲ根カラ止ラルヘキニテモ
ナク追難ノ遺風モ残り社人等モ困究ニ及ハス忝事ニ思ヒ
快ク正ニ帰ラン歟凡ソ此難負ノ事ハ横井時庸^{寺社奉行}

十郎左エ門別 誠公ノ高問ニヨリテ諸書ヲ校索シ一冊トシ難追勘
号天游

文

ト題セリ淫祀ノコトハ天野信景治部別号ヨク弁シテ

一卷ヲ記ス退ニル巫覡言ラ記文ハ予初学ノ為ニ著セリ

此三卷トモニ予文庫ニアレハコレヲ見テ淫祀無レ福シテ

【十二丁ウ】

却テ禍多キ事ヲ知ルヘシ予常ニ淫祀ヲ惡ム故ニ率ル所

ノ社家ヲ曉サトシテ妖巫ノ託宣及ヒ無稽ノ祭祀ヲ止メ彼

本地垂跡真言陀羅尼印相等ノ如キ者委クコレヲ排斥ス

方ニ今コノ難負ノ一事ノミ甚タコレヲ歎ス然トモ予其位

ニアラス且時勢ヲ得ス空シク胸中ニ憂ル而已今ヤ汝カ問ニ

ヨリテ止ヲ得ス粗其一ニマ弁シ了カリソメニモ国政ノ一ニ

預ルコトナレハ甚憚アリマ輒謾ニ他ニ語ルコトナカレ欽哉

難負問答 終

【十二丁オ】

易蘇問答

【十三丁ウ】

此問答世に名高く囂々たり誰人のよみしか四首の

落首ありこゝにしるし添よと人のいふに任せて

左にしるす若輩の仕業汗顔に堪ざる事にこそ

西国をきりなびけたる易蘇をハ尾張の深田喰とめにけり

易蘇堂本曾殿ならて今も又深田に落て身動きもせず

こん中度こそ易蘇過言坎の申震訳しそこなふたとこまりたりけ

ん問答にひしけたりしそ加護こそハ神もなからめ易蘇堂乾兌離震坎艮坤にハ

【十四丁オ】

正韶問テ曰易経何ヲ以テ死シ何ヲ以テ蘇セシヤ

易蘇堂カ曰易ノ書漢唐以來今日マテノ諸儒ノ見

誤レリ易ヲ殺シタリト云ベシ予ハ此見ヲ破シメ發明ノ説

アリ是易ノ蘇リタル所以也故ニ自易蘇堂ト称ス

固ヨリ一家ノ易ニ非ズ天下ノ易也

○問發明ノ説如何

答テ曰史記孔子世家ニ

孔子晩テ而喜ニ易序彖繫象說卦文言一

トアリ是孔子以前ニ上下経十翼トモニ伝来シテアリシヲ

孔子ガ喜テ誦玉ヘル也又漢唐以來ノ諸儒カ象

【十四丁ウ】

辭ハ文王。爻辭ハ周公。十翼ハ孔子ノ作トイヘルハ証拠

ナキ説ニテ取ルニ足ラス然ラバ上下経ト十翼ハ誰

ノ作ト云コトハ今審ニ知ガタシソレハ小便トリニモアレ

乞食ニモアレ道理ノ至極ヲカキノベテサヘアレバ經書ト

シテ尊信スベシ是最第一ノ要説也

○正韶曰

孔子晩テ而喜レ易ヲ

ヲ句トスベシ史記普通ノ本コレヲ句トス
序彖象說卦文言

此序ハ序述ノ義ニミルヘシ象繫象說卦文言ヲ
序述スルノ意也史記正義ノ說ノ

【十五丁才】

序ハ易ノ序卦也夫子作二十翼ヲ云々

序ハ易ノ序卦也ノ說ノミヲ取テ夫子作二十翼ノ說ヲ
取ザルハ取捨偏僻也且正義ノ說ノ如ク序ヲ序卦

伝ノコトトセハ司馬遷何ガ故ニ雜卦ヲ略シテイハサルヤ遷
ハ序ノ字ヲ序述ノ義ニテ書キタランヲ史記ノ注者序
卦ト混シテ思ヘルナラン古今ノ注者カハルコト多シ易ノ大ニ朱子ノ說ヲ
載テ卦變ト考テ占トヲ混シテ注セリ

サレバコソ注者ノ心穩ナラザル故ニ下文ニ雜卦ヲ載セ

ザルコトヲ云テ雜卦ノコトヲ補注セルニテミルヘシ遷カ象

繫象說卦文言ノミヲ挙テ雜卦序卦ヲ略セシハ重キヲ

挙テ輕キヲ略セルコト文章ノ通例也孔安國等ノ經學者ノ
家文ハ文廟カ十翼ハ孔子

ナドイヘルハ漢ハ周ヲ去ルコト遠カラザルガ故ニタシカナル伝説アリテカキタルベシ
司馬遷ハ文章家也史記ハ実ヲ伝ヘシ記録ニハアレトモ文章ヲ主トシテカキタル

【十五丁ウ】

コト多シ其証ニハ下文ニ我ニ數年ヲ若シハ是我於レ易ニ如レ此ノ文意ナレハ

序ハ序述ノ義トミルコト穩当也遷モシ序ヲ序卦ノコトニ

イハバ雜卦ノミヲノコスヘカラス雜卦ヲ挙サルヲ以テ考レ

バコノ序ハ序述ノ序ニテ序卦ニ非ルコト明也モシ上下經
十翼トモニ孔子以前ヨリ伝来セリトイハバ易ト序トノ間ニ

及ノ字ナドアルベシ又文法語勢ニ於テモ

孔子晚テ而喜ニ易序象繫象說卦文言一ヲ

トイヘル如キ例ハナシ

晩而喜易

ニテ句ヲキルベキコト論ヲ待ズシテ明也又史記ノ注意ニ
拠テ解シテモ右ノ一句ニテヨミキリ扱

【十六丁才】

序象繫象說卦文言ヲ

ト古来ヨリノ訓点ノ如クヨミテモヨシ文言ノ下ニ如レク此
アリナト訓点ヲ添テ解スルコト漢土ノ文ニ多シ故ニ注ニモ
其論ナシイカントナレバ漢土ノ人ハコノ文意明カナルガ故
也淺字ノ輩ノシルコトニアラズ文章純熟ノ人ニ問ベシサレ
バコソ史記ノ下文ニ

讀テ易ヲ韋編三タビ絶ノ曰ニ仮シテ我ニ數年ヲ若シハ是我於レ易ニ

則彬々タラン矣

トアリ遷ガ文拠ヲ論ゼバニツノ易ノ字ハ上下經ノコトニシ
テ孔子ガ孔子以前ヨリ伝来セル十翼マデヲ併セテ讀玉

ヘルニ非ズシテ十翼ハ孔子以後ナルコトヲ知ベキ一証也

【十六丁ウ】

又孔安國等ノ上下經ノ彖辭ハ文王。爻辭ハ周公。十翼ハ

孔子ノ作トイヘルハ非也トイヘルハ無稽ノ甚キ者ト云ベシ

漢儒ノ孔鄭等ノ說ハ取ズシテ同ジ漢儒ノ遷ガ說ノミ
ヲ取テ証トスルハ何ゾヤ況ンヤ遷ガ文意ヲ誤解シテ

主張セル僻說ヲヤ実ニ易ニ疵ツクル一己ノ臆說ニシテ

天下ノ公論ニ非ルコト明鏡ノ如シ此返答如何

易蘇赤面シテ默ス

韶因テ問フツラ、汝カ見識ヲ考ルニ上下經十翼中ニナキコトハ捨テ取ザルカ

易蘇曰然リ

韶曰然ラハ河図洛書ハ捨ザルカ

【十七丁オ】

易蘇曰モトヨリコノ二図ハ捨ズ

韶曰然ラバ問ベキコトアリ繫辭伝曰

河出図^{ハツトリ}洛出^シ書^ヲ聖人則^レ之^ニ

コノ則カタイカン

易蘇曰コ、デハイヘマセヌ

○又問同伝^ニ曰

仰^テ以觀^ニ於天文^一俯^{シメ}以察^ニ於地理^一是故^ニ知幽明^一之

故^一原^レ始^レ反^レ終^ニ故^ニ知^ニ死生^一之說^一精氣為^レ物游鬼

為^レ變是故知^ニ鬼神^一之情狀

コノ数語ノ旨如何

曰コ、デハイヘマセヌ

【十七丁ウ】

○正韶序例ニノセタル先天後天ノ図ヲ論ス

易蘇ガ曰是等ノ図ハ鄭朱ノ作りテ伝会セシモノ

ナレハ取ニタラズ

韶曰此図大ニ至理存セリサキニ小便トリニモアレ乞食

ニモアレ至理ノ存セルハ經書トシテ尊信スベシトイヘルト

前後ノ論顛倒スイカン

易蘇閉口ス

○易蘇カ筮法一流ヲナス大ニ繫辭ノ伝ト異也故ニ

正韶問テ曰ソノ筮法ハ繫辭ニ所謂

大衍之数五十其用四十有九云々

トハ異也然ラハ繫辭伝ノ法ハ用ザルカ

【十八丁オ】

易蘇曰繫辭ノ法ハ捨ベカラズ此法ハ略筮ニシテ新井

白蛾平澤左内ノ法ヨリハ勝レリ

正韶曰新平ノ二人ハモトヨリ一家ノ易者ニシテ易字ノ

ミヲ専門ニ唱フルモノニアラズ今易經ヲ蘇活セシメン

トテ天下ノ易ト唱ヘナガラ新平ノ筮法ヲ以テ勝劣ヲ

論セル其見識早浅ナル哉猶說アリヤ

易蘇閉口ス

○韶又問朱子啓蒙明著策ノ篇ニ於テ筮法

ヲ論ズルハ取ルヤ取ラザルヤ

易蘇曰取レリ

韶曰シカラバ汝ハ其用四十九トアルニ背キテ五十本ニ就テ

【十八丁ウ】

初ニ一本ヲ除カズシテ手ニ信^{マカセ}テ数本ヲトルハ大殿繫辭ノ

意ト違ヘリ且七八九六ノ陰陽老少ノ数モ違ヘリ其意イカン

易蘇曰繫辭ト啓蒙ニ云処ハ本法ノ筮法ナリワカ云

処ハ略筮ノ法ナリ

韶曰新平二人モ汝ガ筮法モトモニ略式ナラハ五十歩百歩ノ

論ナレハ我ニ於テ甲乙ヲ論テ齒牙ニカクベキコトニアラズ
イカン

易蘇默然タリ

○正韶前条件ミノ外易中ニアル所ノ教語ヲ挙テ且諸儒
説ヲ拳論問スルニ易蘇ハ韶ガ問フ所ハ答ヘズシテ只己ガ
説ノミヲ云フ因テ

正韶曰弁論トハ古人ノ説ノ是非ヲ弁別シテ己ガ見ヲ論挙ス
ル

【十九丁オ】

コトナルニ我問フ所ハ答ヘズシテ自己ノ説ノミヲ云ハ弁論
トハ云カタシ

先ツ我問フ所一々答ヘヨ

易蘇默然タリ 以上

△正韶曰易蘇ガ説ニ

・上下経ヲ歴史トシ

・教往知来ノ順逆ヲ雙手アルコトヲサシヨキ隻手ヲ以

テ論ジ

・幽風ノ詩ヲ古公亶父ガ殷ヲ後見シテ殷ノ都ヘ定

詰ノ項在所ノ幽ノ荒レタルコトヲ述タル

ナド誠ニ抱腹ニ堪ザル事トモナレバ爰ニ贅セズ

【十九丁ウ】

右易蘇トノ問答ハ去歲十二月十九日ノ事ナリ或人其

論ヲシルサンコトヲ需ル故ニ其一二ヲ挙テコ、ニシルス

天保七年丙申四月廿三日

深田正韶識

右問答ヲ傍聴セシハ戸田寿平其外医師等六七

也其外ハ聴分タルハ戸田氏ナラン耳アルハ定テ聴ワキツラン

聾者ハ分曉ナラジ此問答ノ真偽ハ耳アル人ニ質問

セハ瞭然タラント云爾

天保丙申五月四日 正韶又識

(かりのひとみ)